

[八丈島における遺伝資源の収集, 評価, 保存, 増殖]

フラ用ティの施設栽培技術の確立

～栽培施設の違いが定植後の生育に及ぼす影響～

宮下千枝子・金川利夫

(島しょ農林水産総合センター八丈)

【要約】ビニールハウス, ラスハウスともに, ティの定植後9カ月目からMサイズ以上の葉が収穫できる。また, ティの生育は夏季にはラスハウスで, 冬季にはビニールハウスで促進されることが示唆される。

【目的】

近年のフラ(ダンス)ブームにより需要の増加しているコルディリーネ‘ティ’ *Cordyline terminalis* cv. Ti について, 施設を用いた周年生産技術の確立を目指す。本試験では栽培施設の違いが定植後の生育に及ぼす影響を明らかにする。

【方法】

試験区はビニールハウス(ストロングハウス)およびラスハウスの2区とし, 規模は1区 $3.2\text{m}^2 \times 3$ 反復とした。2008年7月29日に草丈15cm程度の苗を定植した。畝幅80cm, 株間40cmの2条植えとし, 仕立ては1株1本立ちとした。両施設ともにTN-30青(遮光率34.3%)で外張り遮光し, 2009年7月からはTN-60青(同18.5%)による内張り遮光を追加した。施肥はIB化成S1号の追肥のみとし, 1回あたりN換算で5kg/10aを年5回施用した。2009年5月からは収穫を月2回行い, 1株につき展開葉1枚を残して全ての展開葉を収穫した。生育調査は, 草丈および展開した最上葉の葉身長を2カ月ごとに測定した。

【成果の概要】

- 1) 施設内の月別の平均気温は, ビニール区のほうがラス区より常に 0.3°C 以上高かった(図1)。特に冬季の気温差は大きく, $1.7\sim 2.5^\circ\text{C}$ の差がみられた。
- 2) 草丈は, 定植3ヶ月目の2008年11月時点ではラス区のほうが有意に高かった(図2)。その後は徐々に2区の差が縮まって, 2009年7月以降は区間差が無くなり, 9月には2区ともに約100cmに達した。葉身長についても定植後の初期はラス区のほうが大きく, ラス区では2009年1月に, ビニール区では遅れて5月に50cm前後(Mサイズ)の収穫適期に達した。ただし, ラス区では冬季に葉痛みが多く生じたため, 実際に収穫可能となったのは2区ともに5月以降であった。7月以降は葉身長でも区間差が無くなり, 2区ともに55~60cm(M・Lサイズ)で推移した。
- 3) 時期別の草丈の生長量を比較すると, ビニール区では11月から4月にかけての生長量がラス区よりも多い傾向であり, 特に3~4月期の生長量はラス区の3.7倍と顕著に多かった(図3)。一方, ラス区では8~10月と期5~6月期に生長量が多い傾向であった。このように2区間で季節ごとの生育が異なるのは, 施設内の温度環境の違いが一因として考えられる。
- 4) まとめ: ラス区, ビニール区ともにティの定植9カ月目からMサイズ以上の葉が収穫可能となった。また, ティの生育は夏季にはラス区で, 冬季にはビニール区で促進されることが示唆された。今後は, 両施設における季節ごとの収量性や品質などを調査する。

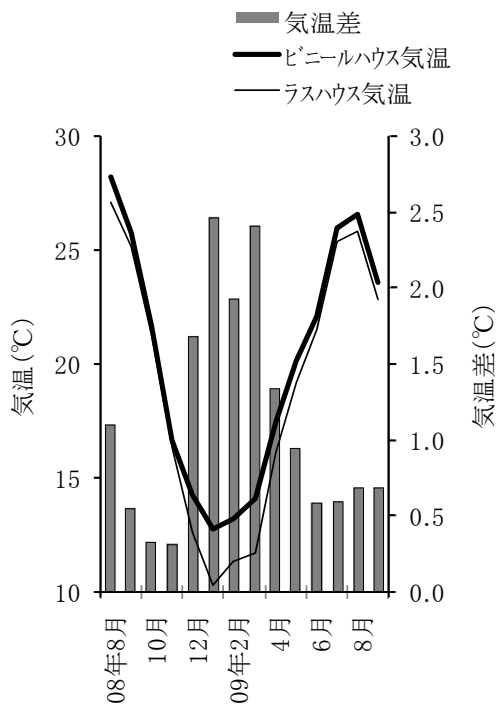


図1 施設内の月別の平均気温
地上1mの位置で気温を測定した。

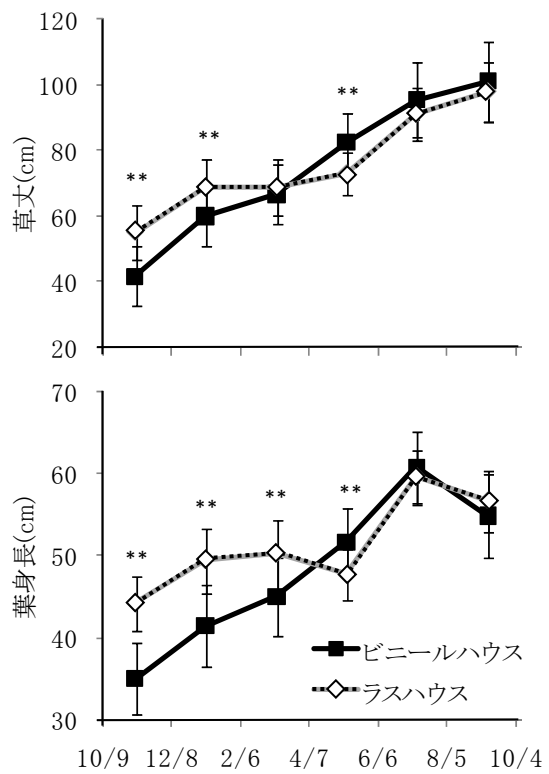


図2 栽培施設の違いがティの生育に及ぼす影響

調査は2008年11月6日～2009年9月9日に行った。縦棒は標準偏差を示す (n=30)。ボンフェローニ順位検定の結果, **記号を付した時期は処理区間で有意差がある (p<0.01)。

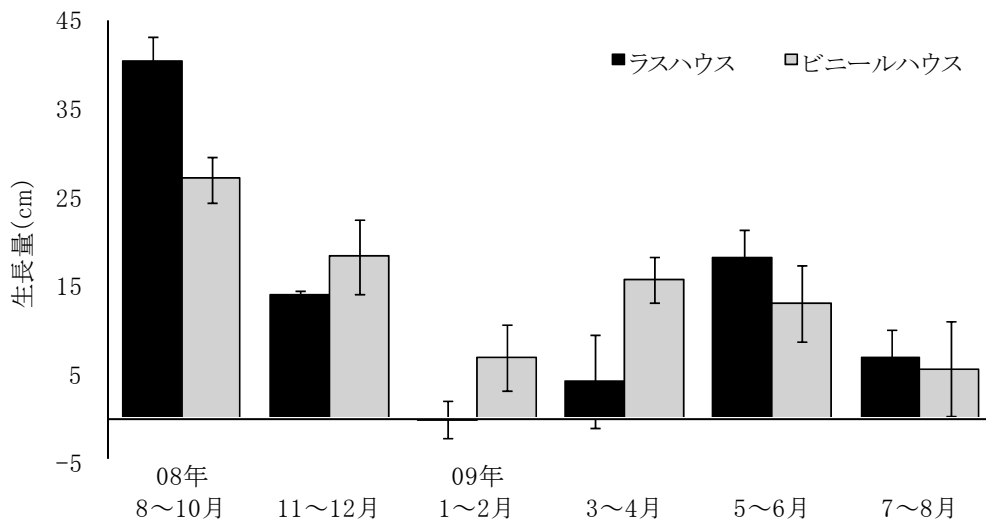


図3 時期の違いがティの生長に及ぼす影響

草丈を2カ月(初回のみ3カ月)ごとに測定し、測定値から2カ月前の値を差し引いた数値を時期別の生長量として示した。縦棒は標準偏差を示す (n=3)。